

現代中国語における「“有点”+形容詞／動詞」と 「“有点”+名詞」のモダリティ性

村 松 恵 子

目 次

1. “有点”の従来の見解と本稿の目的
 - 1.1 “有点”の従来の見解
 - 1.2 本稿の目的
 - 1.3 「対事的モダリティ」と「対人的モダリティ」
 - 1.4 本稿における話し言葉の談話の言語資料
2. 「“有点”+形容詞／動詞」の表現のモダリティ性
 - 2.1 形容詞および動詞がプラス表現の場合
 - 2.2 形容詞および動詞がマイナス表現の場合
3. 「“有点”+名詞」の表現のモダリティ性
4. 「“多少”+“有点”+形容詞／動詞／名詞」の表現
 - 4.1 「“多少”+“有点”+形容詞」の表現
 - 4.2 「“多少”+“有点”+動詞」の表現
 - 4.3 「“多少”+“有点”+名詞」の表現
5. 結論
- 参考文献

1. “有点”の従来の見解と本稿の目的

はじめに、現代中国語における“有点”の従来の見解を示し、次に本稿の目的を示す。

1.1 “有点”の従来の見解

“有点”は従来、“有点”に後置する成分の相違によって、2種類に分類されてきた。1つは、“有点”に形容詞あるいは動詞が後置する場合で、この場合の“有点”は副詞に分類されてきた(下記の①)。もう1つは“有点”に名詞が後置する場合で、この場合の“有点”は、「動詞“有”+量詞“一点”+名詞」と分類されてき

た(下記の②)。

① “有点”+形容詞／動詞⇒“有点”は副詞

② “有点”+名詞

⇒“有点”は「動詞“有”+量詞“一点”」

そして中国語教育においては、どの初級テキスト、どの初級文法解説書においても、上記①の“有点”を副詞と捉える表現(「“有点”+形容詞／動詞」)が取り上げられ、“有点”は「主観的で、好ましくない、望ましくないという気持ちを表す」と解説されてきた⁽¹⁾。したがって、初級テキストや初級文法解説書などに取り上げ

(1) 中国語教育における「“有点”+形容詞／動詞」の表現の従来取り扱い方については、村松2023のp.315に詳述。

られる例文としては、マイナスの意味を表す形容詞および動詞の例が紹介されることとなる。

しかし実際の言語生活においては、「“有点”+形容詞／動詞」に表現される形容詞および動詞は、「有点高兴(少しうれしい)」、「有点舒服(少し快適だ)」、「有点喜欢(少し好きだ)」など、プラスの意味を表す例も多くみられる⁽²⁾。

これらを踏まえて、筆者は村松2023のp. 320において、中国語教育においては、形容詞および動詞がマイナスの意味を表す場合のみを提示するのではなく、プラスの意味を表す場合と、マイナスの意味を表す場合の両方を提示することを提案した。そしてさらに、「“有点”+形容詞／動詞」の本質的意味を提示した上で、両者のそれぞれにおいて、下記のように解説することを提案した。

「“有点”+形容詞／動詞」の本質的意味

⇒「少し「形容詞／動詞」の状況が存在するということを話し手と聞き手が共通理解とするための表現。」

「形容詞／動詞」がプラス評価の場合

⇒好ましい気持ちが意外であったり、通常でなかったりすることを表現する。

「形容詞／動詞」がマイナス評価の場合

⇒好ましくない性質や状態をそのままに表現することを避け、控えめに「少し〜」と表現する。

また、従来の中国語教育および中国語研究においては、「“有点”+名詞」の表現が、1つの文法項目として取り上げられることはなかったと言っても過言ではない。

以上を踏まえ、次に本稿の目的を示す。

1.2 本稿の目的

1.1で述べたように、“有点”は従来、“有点”に後置する成分の相違によって、2種類に分類されてきた。そこで本稿では、従来2種類に分類されてきた“有点”という表現が、現実に表示されている中国語の話し言葉である談話および中国語の書き言葉の文章の中において、“有点”の直後が形容詞／動詞の場合と、名詞の場合のいずれの場合であっても、“有点”を話し手のモダリティ性という観点から見た場合、その表現機能に差がないことを、それぞれ言語資料を基に証明していくことを目的とする。

証明していくにあたって、以下では、まず第2章において「“有点”+形容詞／動詞」の場合の“有点”の話し手のモダリティ性について、言語資料を基に分析していく。次の第3章においては「“有点”+名詞」の場合の“有点”の話し手のモダリティ性について、言語資料を基に分析していく。

最後に第4章において、本稿の目的の傍証となる表現例について、言語資料を基に分析していく。

なお、第2章から第4章において取り上げた言語資料(例(1)から例(9))の日本語訳は、すべて筆者によるものである。

1.3 「対事的モダリティ」と「対人的モダリティ」

「モダリティ」は「対事的モダリティ」と「対人的モダリティ」に分けることができる。

「対事的モダリティ」とは、聞き手および読み手に伝えたい事柄に対して表す話し手および書き手の心情や態度である。

また、「対人的モダリティ」とは、聞き手および読み手に対して表す話し手および書き手の

(2) 「“有点”+形容詞／動詞」の表現にプラスの意味の動詞および形容詞が用いられる例の分析については、村松2023のp. 316から320に詳述。

心情や態度である。

以下、本稿においては、“有点”が「対事的モダリティ」を表現していることを、言語資料を基に検証、証明していく。

1.4 本稿における話し言葉の談話の言語資料

本稿にける、話し言葉の談話の言語資料による分析は、第2章の例(2)から(4)、第3章の例(5)と(6)、第4章の例(8)である。これらの言語資料は、24名の中国語母語話者をインフォーマントとして、1987年から1996年に渡って、筆者が録音した自然発話の言語資料の中で発話されたものである⁽³⁾。

2. 「“有点”+形容詞／動詞」の表現のモダリティ性

ここでは、2.1において“有点”の後ろの形容詞および動詞がプラス表現の場合の表現例について、2.2において“有点”の後ろの形容詞および動詞がマイナス表現の場合の表現例について見ていく。

2.1 形容詞および動詞がプラス表現の場合

下記の例(1)は、“有点”の後ろにプラスの意味の形容詞が表現されている例であり、これは茅盾(1896～1981)の小説である《子夜》(1933年発表)の中に見られた例である。

《子夜》は、中国現代文学の中のすぐれた散文作家として知られる茅盾が、1930年代初頭の半植民地状態にあった中国の縮図のような上海を舞台に、民族資本家である呉孫甫の野望と挫折を描いた長編小説である。

下記の例(1)は、民族資本家である呉孫甫が、呉家の総支配人である費曉生、呉孫甫の甥の呉為成、費曉生が連れて来た20歳くらいの青年の馬景山と会話している部分を抜粋したものである⁽⁴⁾。

例(1)

…忽然吴孙甫站住了，鼻子里轻轻哼一声，不能相信似的问那小鬍子道：

“晓生，你说是省政府的命令要宏唱当也继续营业不是？”

“是！还有通源钱庄，油坊，电厂，米厂，都不准停闭。县里的委员对我说，镇上的市面就靠三先生的那些厂和那些铺子；要是三先生统统把来停闭了，镇上的市面就会败落到不成样子！”……

“嘿！他们也说镇上市面怎样怎样！他们能够保护市面么？”

吴孙甫冷冷地狞笑着说。他听得家乡的人推崇他为百业的领袖，觉得有点高兴了。」

「…急に呉孫甫は立ち止まると、鼻を軽くフンと鳴らし、疑わしげにその山羊ひげ（呉家の総支配人である費曉生のこと）に向かって言った。

「曉生、つまり省政府的命令は宏唱質店を続けて営業しろということなのか？」

「そうです。その他に、通源錢莊、製油工場、発電所、精米所のすべてを止めてはいけないということです。県政府の委員は、町の景気は呉家のあれらの工場とお店に頼っている、もし全部営業停止になれば、町の景気はすっかり落ちぶれてしまうと、私に言いました。」

(3) インフォーマント24名はすべて大学卒業以上の学歴を持つ。インフォーマント24名の個人履歴および録音状況(出身地、録音年、録音時間、録音当時の年齢等)の詳細について、村松2019のp.4～7を参照のこと。また、インフォーマントを示すアルファベットも、村松2019のP.5～7の表記に従った。

(4) 茅盾(1952)p.281～282

……

「フン！ やつらでも町の景気がどうのこうのと言うのか！ やつらに町の警備が十分にできるか？」

呉蓀甫は、冷やかに薄気味悪く笑いながらそう言ったが、故郷の人々が、彼のことをあらゆる業種のリーダーであると尊敬していると聞くと、少しうれしいと感じた。」

ここで表現されているプラス評価の形容詞は“高兴”で、“有点**高兴**”と表現されている(例(1)の下線部分)。

民族資本家である呉蓀甫は、省政府は呉家が経営しているあらゆる業種の経営継続を命令し、さらに町の景気は呉家の工場とお店に頼ったものであると、県政府の委員が言っていると聞いた。そしてそのことによって呉蓀甫は、自分は故郷の人々にあらゆる業種のリーダーであると尊敬されていると感じ、そのことを「“觉得有点**高兴**了”=少しうれしく感じた」と表現している。

呉蓀甫は、熾烈な競争状況にある上海の経済界で、利益第一で野望を持って戦っている。そんな自分が「故郷で人々にあらゆる業種のリーダーであると尊敬されている」というのは、意外な事柄である。そこでそれをここでは“有点**高兴**”と表現している。

次に、“有点”の後ろの動詞がプラス表現の場合を見ていく。

下記の例(2)は、“有点”の後ろの動詞がプラス表現の場合の例である。

例(2)では、録音当時、日本の大学の大学院生であったKが、自分が論文を書く時の状況をJに説明している。

例(2)

J = 最近主要忙什么？ 忙论文吧？

K = 最近就是天天都在忙论文。

J = 现在写得怎么样？

K = 现在还没开始写，不过在做准备吧。也就是说收集些资料，然后主要是自己想。我这个人喜欢多想，想得比较多。晚上有时候，精神比较好的时候，就想得很晚。

J = 那也好。那样在脑子里想出一个形来，成形以后，…

K = 嗯，也许跟我性格有关系，我比较懒，我这个人。愿意多想，但不愿意多写。得想，一定要想到差不多了，觉得自己好像有点**把握**了以后，然后再动毛笔。然后一旦写的话呢，我喜欢一下子，集中在一块儿写。

「J = 最近は主に何で忙しいですか？ 論文で忙しいですか？

K = 最近は毎日論文で忙しいです。

J = 今書くのはどういう状況ですか？

K = 今はまだ書き始めていなくて、でも準備はしていますよ。つまり資料を集めて、その後で主として自分で考えます。私はたくさん考えるのが好きで、考えるのが割合と多いです。夜、精神的に良い状況の時には、遅くまで考えます。

J = それもいいですね。そうやって頭の中の一つ形が出てきて、形になった後で、…

K = ええ、私の性格と関係があるかも知れませんが、私は割合と怠け者です、私という人は。たくさん考えたいけど、たくさん書きたくない。考えるべきところまでは考えて、自分が**少し把握した**ようだと感じたら、その後、書き始めます。そしていったん書き始めると、私はしばらく楽しくて、集中して一気に書きます。」

ここでは“有点**把握**”と表現されている(例(2)の下線部分)。

“有点”の後ろのプラス表現としての動詞が“把握”で、“把握”は「抽象的なものをしっか

りととらえる、つかむ」という意味である。したがって「“有点**把握**”=少し把握する」というのは、“把握”という動詞が本来示している意味とは矛盾する表現である。しかしKは、論文に対する考えを“有点**把握**”した後に書き始め、さらに一気に書く、と説明している。

論文を書き始めて、それをまとめていくという行為は、それぞれ人によって対応の仕方が異なる。とりあえず書き始めて、書きながら考えていくタイプや、論文の論の枝葉末節まで考え抜いてから書き始めるタイプなど、様様ではない。Kは「たくさん考えて、集中して一気に書く」というタイプで、決して一般的な通常のタイプということとはできない。そしてこのタイプの場合、論旨を「しっかりと把握して」から書き始めることとなる。それをKはここで、“有点**把握**”と表現しており、これは現実の状況とは矛盾する表現である。では、なぜKはここで“有点**把握**”と表現しているのか。それは、「論旨を十分把握して」から論文を書き始めるという書き方が、決して論文を書く場合の一般的な書き方という訳ではないからである。そこで例(2)ではそのことを、“有点**把握**”と表現している。

2.2 形容詞および動詞がマイナス表現の場合

下記の例(3)は、“有点”の後ろの形容詞がマイナス表現の場合の例である。

例(3)では、録音当時、日本の大学の大学院生であったインフォーマントCが、「私の日本での発見」というテーマで外国人留学生スピーチコンテストで発表した本番の時の感想を語っている。

例(3)：

C=刚开始的时候，有点儿紧张。最后呢，越来越底下坐的人我也渐渐看清楚，谁谁谁坐在哪儿我都看清楚了。

「C=(自分の本番のスピーチが)始まったばかりの時は、少し緊張しました。最後には、だんだんと(会場に)座っている人も次第にはっきりと見えるようになり、誰がどこに座っているのか全部ははっきりと見えました。」

ここでCは、コンテスト本番で自分のスピーチが始まった時の自分の様子を語っている。ここでCは、スピーチが始まったばかりの時、自分は「“有点儿**紧张**”=少し緊張した」と言っている(例(3)の下線部分)。それに続いて「最後には、次第に会場に座っている観客の顔がはっきりと見え、誰がどこに座っているのかが、はっきりと分かった」と述べている。つまりCは、スピーチの最後になってやっと観客の顔まで分かるくらいに落ち着いたということであり、スピーチを始めたばかりの時は、相当緊張していた判断することができる。しかしCは例(3)において「“刚开始的时候，有点儿紧张”=(スピーチが始まったばかりの時は、少し緊張した)」と説明している。これは自分にとって好ましくない状態をそのまま発言することを避け、少し控えめに表現していると判断することができる。

次に、“有点”の後ろの動詞がマイナス表現の場合の例を見ていく。

下記の例(4)は、“有点”の後ろの動詞がマイナス表現の場合の例である。

例(4)では、Dが上海への留学を希望している若い日本人女性に対して、留学の心得を長時間アドバイスした時の状況が語られている。

例(4)

D=这一次有一个日本学生要到上海去留学，后来，有一个日本朋友就是介绍我跟她认识了。后来，她向我了解一下中国的情况，我说：“你去了以后吧，因为你去学汉语，你

決不能把自己圈在就是留学生的小圈子里面。如果你把自己圈在小圈子里边以后吧，你的汉语就提高不快。你一定要离开这圈子，你要主动地跟中国的那些大学生去交朋友。可能你也不一定都能碰上好人，也可能会碰上坏人，这也没关系。对你的生活经历来说，也是一个很有意思的。一方面呢，你通过和这些中国大学生交朋友，可以学习汉语，另一方面呢，可以了解中国社会，了解中国人。因为中国人也是各种各样的，就是哪个社会也都一样啊。”她说：“对。”她说她也感觉到日本人就是不是积极的，是消极的，她也承认就是那个。那天我们谈了很长时间，她也觉得就她也有点**害怕**。一个小女孩刚大学毕业以后吧，她没有工作，她就在一个报社里边打工，完了攒了一点钱，她向去中国留学一年，到上海去留学一年。

〔D=今回、上海に留学したいという日本人学生がいて、ある日本人の友人が彼女を私に紹介しました。彼女は私に中国の状況を教えて欲しいということだったので、私は彼女に言いました。「あなたは（上海に）行った後、あなたは中国語を勉強しに行くのだから、決して留学生の小さなグループの中にはいけませんよ。もし小さなグループの中にいたら、あなたの中国語は早く上達しません。あなたは必ずこのグループから離れなければならず、積極的に中国の大学生たちと友だちにならなければなりません。あなたは良い人と出会うとは限らないし、悪い人と出会うかもしれませんが、これも仕方ありません。あなたの生活経験から言えば、これも意味のあることです。1つには、あなたはこれらの中国の大学生との交流を通して、中国語を勉強することが

でき、もう1つには、中国社会、中国人を理解することができます。なぜなら、中国人も色々で、どの社会でも同じです。」彼女は言いました。「その通りです。」彼女も日本人は積極的ではなく、消極的であると感じていて、そのことを認めていました。その日、私たちは長時間話をし、それでも彼女は少し心配そうに感じていました。彼女は大学を卒業した後、仕事をしておらず、ある新聞社でアルバイトをし、少しお金を貯めて、中国へ、上海へ1年留学するということです。〕

Dは、上海に留学に行こうとしている若い日本人女性に、長時間にわたって、留学中の心得についてアドバイスしている。長時間にわたってアドバイスを受けたにもかかわらず、その後もこの若い日本人女性の不安は消えることなく、「“她也觉得就她也有点害怕”」=それでも彼女は少し心配そうだった」と語っている（例(4)の下線部分）。

Dのアドバイスは至極真っ当な内容である。そしてDは至極真っ当なアドバイスを長時間行った後でも彼女の不安が消えなかった理由の1つとして、この日本人女性が大学卒業後もアルバイトの経験しかなく、社会性が十分でないことを挙げている。このような若い日本人女性が上海に留学する際の不安は、決して「少し」ではないと判断することができる。しかし、Dはここで“她也觉得就她也有点害怕”と述べている。これは明らかに少し控えめに“有点害怕”と表現しているということができる。

以上見てきたように、「“有点”+形容詞／動詞」の表現は、形容詞および動詞がプラスの意味であってもマイナスの意味であっても、聞き手を配慮して「少し〜」と表現するモダリティ性の高い表現であるということができる。

以下では、“有点”の後ろが名詞の場合の表現のモダリティ性について見ていく。

3. 「“有点”+名詞」の表現のモダリティ性

従来中国語教育においては、「“有点”+名詞」の表現が1つの文法項目として取り上げられることはなかった。第1章において述べたように、通常この表現は「動詞“有”+量詞“一点”+名詞」と分類されるため、「量詞“一点”+名詞」が動詞“有”の目的語として表現されると捉えられてきた。これにより、従来「“有点”+名詞」の表現が「“有点”+形容詞/動詞」の表現と同じ観点から分析、研究されることはなかった。

以下で、実際に話し言葉の談話の中で表現されている「“有点”+名詞」の表現例を見ていくことによって、その表現機能を分析していく。

下記の例(5)では、インフォーマントEがGに北京人のおしゃべり好きについて語っている。

例(5)

E=北京人向来就爱聊。吃完饭之后，拿个大蒲扇，小板凳，往那门口一搬，一座，然后就聊开了。就是聊的内容不一样了。多去呢，就是大家都围着老头儿，听老头聊过去的老北京，或者聊三国什么的。现在呢，就是年轻人在一起聊的时候，有时候，就是差不多发牢骚比较多。

G=谈国事，发牢骚。

E=嗯。还有一些就是怎么说呢，就是有点儿志气的人吧，年轻人有点儿志气的人就是谈一谈正事儿啊。

[E=北京の人は昔からずっとおしゃべりをするのが好きです。ご飯を食べた後、大きな扇子を持って、(木製の)小さな腰掛を

戸口に運んで座り、それからおしゃべりを始めます。おしゃべりの内容は同じではありません。昔はたくさんの人がみんなおじいさんを囲んで、おじいさんの過ごした昔の北京の話の聞いたり、三国志の話の聞いたりしました。今はね、若い人が一緒におしゃべりをするときは、だいたい不平不満を言うことが多いです。

G=国のことを話して、愚痴をこぼします。

E=ええ。それから、少し気骨がある人はね、若い人で少し気骨がある人は真面目なことを話しますね。]

まずEは昔の北京人のおしゃべり好きについて話し、それに続けて今の若者について評価し、今の若者の中にも真面目な話をする人はいるといふ。「年轻人有点儿志气的人就是谈一谈正事儿啊。」=若い人で少し気骨がある人は真面目なことを話す」というのがそれである(例(5)の下線部分)。“志气”とは「気骨、気概、意気込み」などを意味する名詞である。たとえば「気骨」とは、「自分の信念に忠実で容易に人の意に屈しない意気」(『広辞苑』第7版, p. 700)という意味である。しかし「“一点志气”=少しの気概」という表現は、このような強い意気を表す“志气”という名詞が本来示している意味とは矛盾する表現である。それにもかかわらず、Eはここで「少し気骨がある人は(不平不満をいうのではなく)真面目なことを話す」と表現している。そしてこれは決して不自然な表現ではない。例(5)に示したような「“一点”+名詞」の形では意味的に矛盾する表現も、「“有点”+名詞」という表現形式を用いることによって、自然な表現となっている。

ここで、「“有点”+志气」が成立するのは、ここで述べている状況が決して一般的な状況ではないからである。そして単に“有志气”と表現するのではなく、“有一点志气”と表現する

ことにより、そこには話し手の好ましく思う意外な心情が見て取れる。

もう1つ、「有点」+名詞」の例を見ていく。

下記の例(6)は、インフォーマントMがSに、日本での留学生活について語っている談話の一部である。

例(6)

M=我在前几年，每回到家就打开电视。总觉得哈，比如说你在那做饭也好，在这几干什么的事，开着电视有点声音。

S=就不寂寞。

M=不寂寞，是一方面起码它在说日语，对自己听力有好处。

S=没错。

M=我是这么想哈。

[M=私は数年前，毎回家に帰るとテレビを付きました。たとえばご飯を作る時も，何かをするときも，テレビを着けていると少し音がある，といつも感じていました。

S=そうすると寂しくない。

M=寂しくなくて，もう1つには，少なくともテレビは日本語を話しているから，自分の聴く力にとってプラスになります。

S=その通りです。

M=私はそう考えていました。]

ここでMは「有点」+名詞」として“有点声音”と表現している(例(6)の下線部分)。これはテレビの音のことで，例(6)では，録音当時，日本の大学の大学院生であったMは，日本で一人暮らしをしているアパートに帰ると，すぐにテレビを着けたと話している。その理由の1つが，日本語を聴く力を付けるためであると説明している。“有点声音”は「少し(テレビの)音がある」という意味だが，単なる寂しさを紛らわすための音でなく，日本語の聴く

力を付けるためにテレビを聴くには，それなりのボリュームが必要である。それにも関わらず「有点声音」=少しの音がある」と表現するのは，現実の状況を少し控えめに表現していると判断できる。

以上，「有点」+名詞」の表現について見てきた。

従来この「有点」+名詞」は，「動詞“有”+量詞“一点”+名詞」と捉えられ，1つの文法項目として取り上げられることはなかった。しかし，上記の2例から，「有点」+名詞」という表現も，話し手の伝えたい事柄に対するモダリティ性という観点から分析すると，実際の言語生活においては，「有点」+形容詞/動詞」という表現形式と同様の機能を果たしていると判断して差し支えない。

以下では，「有点」+名詞」の表現形式と「有点」+形容詞/動詞」の表現形式が，実際の言語生活において同様の機能を果たしていると判断して差し支えない傍証として，“有点”の前に副詞の“多少”が前置する「多少有点」という表現に着目して分析していく。

4. 「多少」+“有点”+形容詞/動詞/名詞」の表現

副詞の“多少”は不定の数量を表しており，「数量や程度に多い少ないの差はあっても」という意味である。したがって“多少有点”は「多かれ少なかれ少しはある」という意味である。

以下で，“多少有点”に形容詞，動詞，名詞のそれぞれが後置する例を，順に見ていく。

4.1 「多少」+“有点”+形容詞」の表現

表題の表現は日本語に直訳すれば「多かれ少なかれ少しは「形容詞」の状況が存在する」という意味である。

下記の例(7)は，1985年の人民日報(中国

共産党中央委員会の機関紙)の中に見られた「“多少”+“有点”+形容詞」の表現例である。

例(7)では、この記事の筆者がそれほど大きくない望遠鏡でハーレー彗星を見ることができた時の様子を説明している。

例(7)

“看到了，看到了！”我惊叫起来。在双鱼座座的中间，我看见一个边缘不很清晰的圆形亮团，它在镜筒里慢慢移动……这架望远镜小些，从中看到的哈雷彗星还不那么明亮，多少有点模糊。

「見えた！ 見えた！」私は驚いて大きい声で言いました。うお座の中間に周りのはっきりしない円形の明るく光る集団が見え、それは天体望遠鏡の鏡筒の中をゆっくり移動し……この望遠鏡は少し小さくて、その中から見えるハーレー彗星はやはりあまり光線が明るくなくて、多かれ少なかれ少しぼんやりしていた。」

例(7)の中では、「“多少”+“有点”+形容詞」として“多少有点模糊”と表現されている(例(7)の下線部分)。

ここで筆者が伝えたいのは、「ぼんやりしている状況が多いか少ないか」ということではなく、「ぼんやりしている状況が多いか少ないかは問題ではなく、どちらにしてもぼんやりしているという状況が少しは存在している」ということである。

次に、「“多少”+“有点”+動詞」の例を見ていく。

4.2 「“多少”+“有点”+動詞」の表現

表題の表現は日本語に直訳すれば「多かれ少なかれ少しは「動詞」の状況が存在する」という意味である。

下記の例(8)は話し言葉の談話の中で発話

された「“多少”+“有点”+動詞」の表現例である。

例(8)では、インフォーマントWとXが、飛行機に乗るのが怖いという話をしている。

例(8)

W = 我觉得我坐飞机的时候，为什么老怕掉下来了。害怕。我坐飞机的时候，我老看空中小姐的表情。

X = 是吗？

W = 如果她们比较轻松哈，不紧张的话，那肯定没事儿。如果要是，哎呀，特紧张那样的…

X = 那你算了吧。人家，空中小姐的话，要训练，要面部不要带表情，即使遇到什么困难一点表情也不能够带出来。

W = 多少有点儿变化，我觉得。哈哈哈

X = 哈哈哈

W = 再训练她，多少有点儿变化。

X = 也不行哈。确实心理压力太大了。

W = 就是。也不自然。

「W = 私は飛行機に乗る時、何故かいつも飛行機が落ちるんじゃないかと怖くなります。私は飛行機に乗る時には、いつもキャビンアテンダントの表情を見ます。

X = そうなんですか？

W = もし彼女たちが割合とリラックスしていたら、緊張していなかったら、きっと何もないということです。もし、ものすごく緊張している様子だったら…

X = よしてくださいよ。キャビンアテンダントの場合は、訓練しなくちゃいけないから、たとえどんな困難に遭遇して少しも表情に出すことはできません。

W = 多かれ少なかれ(表情は)少し変化すると思います。ハハハ

X = ハハハ

W = いくら訓練しても、多かれ少なかれ（表情は）少し変化します。

X = そうかも知れませんね。確かに心理的なストレスが大きすぎます。

W = そうでしょ。絶対に自然な表情にはならないです。」

例(8)の中では、「“多少”+“有点”+動詞」の例として、“多少有点**变化**”と表現されている(例(8)の下線部分)。

例(8)の談話の中でWとXは、キャビンアテンダントの表情について意見交換している。当初、キャビンアテンダントは訓練によって、どんな状況でも表情を変化させないと言っていたXだったが、最後には、「いくら訓練しても、多かれ少なかれ表情は変化する」というWの意見に偏っていく。つまり、この“多少有点**变化**”という表現でWが伝えたいのは、「(表情が)変化するのが多いか少ないか」ということではなく、「(表情が)変化するのが多いか少ないかは問題ではなく、どちらにしても(表情が)変化するという状況が少しは存在している」ということである。

最後に、「“多少”+“有点”+名詞」の例を見ていく。

4.3 「“多少”+“有点”+名詞」の表現

表題の表現は日本語に直訳すれば「多かれ少なかれ少しは「名詞」が存在する」という意味であり、下記の例(9)が「“多少”+“有点”+名詞」の表現例である。

下記の例(9)は、王蒙の小説《坚硬的稀粥(硬いおかゆ)》の中に見られた例である。

王蒙は1934年に北京で生まれた、現代中国文学界を代表する作家である。《坚硬的稀粥(硬いおかゆ)》は1989年に中国作家協会出版の《中

国作家》(第二期)に発表された短編小説である。1989年という年は、中国が「改革・開放」政策に舵を切って、ちょうど10年目にあたり、この10年間に中国は猛スピードで近代化していった。この猛スピードの近代化に対して若者は敏感に反応していった。下記の例(9)は、その若者の代表者として描かれている主人公の息子が、家族の中でどのような存在として捉えられていたのかということを描写している部分の一部である⁽⁵⁾。

例(9)

我向儿子悄悄摆了摆手。他的西式早餐化纲领失败之后，在家中的形象不佳，多少有点冒险家，清谈家，成事不足败事有余甚至造反派的色彩。包括堂妹与堂妹夫，对我吾儿也颇看着不顺眼。他跳高了，只能给堂妹夫帮倒忙。

「私は息子にこっそりと手を振って、黙るように合図した。息子は朝食の西洋化綱領に失敗したあと、我が家でのイメージはささなくて、多かれ少なかれ少し冒険家，清談家で、事を台無しにしてしまい、甚だしくは造反派であるというイメージがあった。従妹と従妹の夫も含めて、我が息子のことをたいそう気に入らなかった。息子がはしゃぐ(何かをやらかす)のは、従妹の夫にとってはただの有難迷惑でしかなかった。」

例(9)の中では、「“多少”+“有点”+名詞」の例として、“多少有点**冒险家，清谈家**”と表現されている(例(9)の下線部分)。

この小説の中で、“我吾儿(私の息子)”は17歳である。1980年代に入って中国は急激に西洋化し、息子はその先頭を切って西洋化を受け入れていった世代である。

(5) 王蒙(1993) p. 654

17歳の息子は、ずっと中国の伝統的な朝食で生活してきた、「四世同堂」の家族（四世代が同居する家族）の中で、朝食を西洋化しようとして失敗する。その他にもいろいろ家庭内を西洋的に改革しようとして、家族にそっぽを向かれてしまった息子である。アメリカ留学の経験のある先進的な従妹の夫にまでそっぽを向かれてしまった。その息子のことを“多少有点冒険家，清談家”と表現している。作者がここで伝えたいのは、「(私の息子が)冒険家であり、清談家であるということの程度が多いか少ないか」ということは問題ではなく、「どちらにしても、(私の息子は)少しは冒険家であり、清談家である」ということである。

上記の3例から、「多少+“有点”」に形容詞が後置した場合も、動詞が後置した場合も、名詞が後置した場合も、いずれの場合であっても、形容詞、動詞、名詞の状況が多いか少ないかは問題ではなく、どちらにしても少しは「形容詞／動詞／名詞」の状況がある」ということを意味している。このように、“多少有点”の後ろは形容詞であっても動詞であっても、また名詞であっても、談話あるいは文章において、その表現機能は同じであると判断することができる。

5. 結論

以上、従来、2種類に分類されてきた“有点”

について、“有点”の話し手のモダリティ性という観点から分析してきた。上記の例(1)から例(9)の表現例の検証により、“有点”に形容詞あるいは動詞が後置する場合でも、“有点”に名詞が後置する場合でも、“有点”は話し手(書き手)の伝えたい事柄に対するモダリティ性という観点からは、両者の“有点”を区別する必要はないということができよう。

しかし、中国語教育の、特に入門および初級段階で、“有点”に対して、ここまで解説する必要があるかどうかについては、検討の余地がある。

参考文献

- 相原茂 (2016) 『Why? にこたえるはじめての国語の文法書 (新版)』 同学社
 謝平 (2008) 「日本語の「ちょっと」と中国語の“有点”について」, 『ことばの科学』 第20号, 名古屋大学言語文化研究会
 杉村博文 (1994) 『中国語文法講座』 大修館書店
 丸尾誠 (2010) 『基礎から発展までよくわかる中国語文法』 アスク出版
 村松恵子 (2019) 『現代中国語談話論』 好文出版
 村松恵子 (2023) 『中国語教師のための基礎講座』 白帝社
 吕叔湘主编 (1980) 《现代汉语八百词》 商务印书馆

言語資料

- 茅盾 (1952) 《子夜》 人民文学出版社
 王蒙 (1993) 《王蒙文集 (第四卷)》 华艺出版社

On the Modality of *youdian* in Modern Chinese:
 A Case Study of ‘*youdian* and an Adjective or a Verb’ and ‘*youdian* and a Noun’.

Keiko Muramatsu